

## 事後評価報告書

### 1. 基本情報

実行団体名	飛んでけ車いすの会
実行団体事業名	「車いすの学校」を活用した “三方よし！” の社会的弱者支援
資金分配団体名	一般社団法人北海道総合研究調査会
資金分配団体事業名	北海道未来社会システム創造事業
事業の種類	草の根活動支援事業
実施期間	2020年4月～2023年3月
事業対象地域	札幌市・白石区・千歳市・余市町

### 2. 事業概要

#### (1) 事業によって解決を目指す社会課題

社会的弱者（障がい児・者、引きこもり、8050問題、不登校、未診断の発達障害、生活困窮者、技能実習生など）が、社会とつながり孤立から脱却する場、学校や職場への順応など社会的スキルを獲得する場、役割を持ち、多様性を認めあい共に助け合える安全なプラットフォームの確保を、本事業によって解決を目指す社会課題とする。

#### 【想定した直接的対象グループ】

本事業が定義する社会的弱者：  
障がい児・者、引きこもり、8050問題、不登校、未診断の発達障害、生活困窮者、技能実習生などのベトナム人

## (2) 事業の概要

### ①中長期アウトカム

札幌市、白石区、千歳市、余市町において、社会的弱者（障がい児・者、引きこもり、不登校、生活困窮者、外国人労働者など）が、小規模多機能な「車いすの学校」に参加することで居場所と役割を持つことにより社会的孤立を脱し、ひいては就労や就学、社会参加の意欲の向上が見られる。また、小規模多機能な地域資源を活用した社会的弱者支援実施モデルが構築されることにより、多くの自治体で社会的弱者が社会的孤立から脱却できる状態を目指す。

### ②短期アウトカム

1. 社会的弱者（障がい児・者、引きこもり、不登校、生活困窮、ベトナム人労働者）が「車いすの学校」に参加し、居場所を持ち、ひいては就労・就学・社会参加意欲、およびコミュニケーションが向上する。
2. 「車いすの学校」に設置されているPTA・保健室・キャリア支援室において実施される相談において、参加者が、自身のことや家族に関することを相談するようになる。
3. 「車いすの学校」の運営プロセスの記述により、社会的弱者への継続的支援を実現する実施モデルの周知・活用がなされる。
4. 応用編である既存の地域資源を活用した実施モデルが作成・周知され、各自治体が自立して社会的弱者支援を始めるための提案がなされる。

### ③実施した活動

- 本会事務所での「車いすの学校」実施：コロナ禍にあった3年間、緊急事態宣言発令以外は実施（申し込みなしの回もあり）
- 京極町社会福祉協議会に登録する「男性の会」への「車いすの学校」講師派遣 ウィンドシールドサーベイの実施
- 「車いすの学校」祭：車いす最高飛行国ベトナムの文化・コミュニティに因んだイベントの実施
- 「車いすの学校」に付帯する機能、家族相談、健康相談、キャリア支援室事業
- 「車いすの学校」実施等希望調査：2021年3月、白石区の事業所リスト、機縁法によりリクルートした札幌市内の就労支援系サービス、フリースクール、引きこもり支援グループなどに対するアンケートの実施
- 貧困からの脱出者（8050の方でもあった）へのインタビュー：道で雑誌販売をしている方
- 生きづらさを抱える方（診断なし）へのインタビュー：大卒後就職が叶わなかった方
- 白老町コミュニティワーカーとともに地域食堂での交流会、ウィンドシールドサーベイの実施
- 蘭越町、蘭越高校、蘭越町社会福祉協議会：「車いすの学校」の趣旨・内容の地域への周知
- アフリカ国内留学体験イベントの実施：アフリカ出身の学生4名（タンザニア、マラウイ、ザンビア、ナイジェリア）に、「フードドライブ」「冬物衣類・靴の提供」が実施。「車いすの学校」周知
- 白石区コミュニティラジオ出演：「車いすの学校」の趣旨・内容の地域への周知
- 千歳市奉仕活動を行う組織での講演：「車いすの学校」の趣旨・内容の周知、協働者のリクルート、ウィンドシールドサーベイの実施
- 「(障がい者) 地域活動センター」での「車いすの学校」実施

<p>地域で暮らす障がい（身体・精神・知的）を抱えている方の日常・社会生活サポート機関でのアクティビティ提供と交流の促進</p> <p>□ ベトナム人技能実習生支援団体：介護等の技能実習生を対象とした「車いすの学校」実施についての協議</p>
<p>④出口戦略</p> <p>コロナ禍の3年間を実施してきた本事業の出口戦略は、少ない活動実績（データ）ではあるがそれを丁寧に分析し、そこから見出された展望・成果・課題への対処を含め、社会・国民に分かりやすく発信することである。</p> <p>その方法は、ひとつに成果報告書ならびに「車いすの学校」をメディア・印刷物の作成と団体や全道自治体への送付、本会ホームページ、Facebookなどで広くあまねく知らしめていくことである。また、今後、本事業に倣って実践し、評価することを継続的に行う環境を整え、実践家や大学教員との協働で、学会・学会交流集会においてプロセスから成果までの実践発表をし、かつ学会誌への投稿、NPO 論等のテキストなどへの掲載も行っていくことである。</p>

### 3. 事後評価実施概要

#### (1) 実施概要

##### ①この事業の重要なポイントとして設定した変化

「車いすの学校」が社会的弱者の第3の居場所となり社会生活に広がりを持つためのひとつのステップになること。また「車いすの学校」の実践を手掛かりにして、既に市町村などで行っている小規模多機能な事業を、社会的弱者支援に活用できるモデルができあがること。

##### ②事後評価のための実施した調査

調査 I	<p><b>【関連する短期アウトカム】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的弱者（障がい児・者、引きこもり、不登校、生活困窮、ベトナム人労働者）が「車いすの学校」に参加し、居場所を持ち、ひいては就労・就学・社会参加意欲、およびコミュニケーションが向上する。</li> <li>・「車いすの学校」に設置されているPTA・保健室・キャリア支援室において実施される相談において、参加者が、自身のことや家族に関することを相談するようになる。</li> </ul>
<p>1) 調査及び分析方法：「アウトカムの分析 ⑧アウトカムの達成度」</p> <p>(1) 「車いすの学校」実施：定量データ 実施回数、参加者数、継続（複数回）参加者数</p> <p>(2) 「車いすの学校」設置機能：定量データ PTA（家族相談）・保健室（健康相談）・キャリア支援室相談件数</p> <p>(3) 「車いすの学校」参加による変化：個別インタビュー（定性データ） 自己開示、就労・就学意欲の向上、生活態度の改善 対人コミュニケーションの改善</p>	
<p>2) 実施時期 2022年9月～</p>	
<p>3) 対象者 (1) 自組織・事業対象者</p>	

(2) 自組織専門職					
(3) 事業対象者					
4) 結果 (明らかになったこと)					
(1) 「車いすの学校」の実施状況					
実施状況 / 年度	2020	2021	2022	合計	
①実施 (回)	17	12	23	52	
②対象参加延/全員延 (人)	23/91	8/38	39/104	70/233	
③対象複数回参加/対象参加 (人)	3/13	3/3	7/25	9/41	
④対象修了/全修了 (人)	1/5	0/2	2/9	3/16	
⑤指導者 (匠) 延 (人)	60	28	44	132	
※対象：本事業の対象である社会的弱者、全員：「車いすの学校」の全参加者					
⑥その他：社会的弱者に対する理解の深まり：指導者 (匠) の言葉					
以下のように実際に指導してみることで、障がい者に対する理解が深まっていった。					
<input type="checkbox"/> 「精神障がい者」と聞いて医療専門職ならばすぐにイメージできることも、自分たち素人 (指導者) にはわからず不安であった。通所施設などの事前見学や障がい特性に合わせた丁寧な準備、時間の余裕をもった実施の必要性を感じた。					
<input type="checkbox"/> 対象者の障がい特性に合わせた指導者 (匠) のマッチング (合理的配慮) をすると指導がうまくいくことがわかった。					
<input type="checkbox"/> 精神障がい者通所施設の方々は、興味を持ち楽しそうに一生懸命に整備をしていた。指導者 (匠) も楽しんででき、教えれば響く感じもありポジティブな印象を受けた。					
<input type="checkbox"/> 一方、対象者は、根を詰めて行くと疲れを感じやすくもあり、間で休みを取るよう指導者 (匠) から声掛けをする必要があった。					
(2) 「車いすの学校」設置機能					
①PTA (家族相談) 件数：2 件					
<input type="checkbox"/> 成人については家族同伴の参加なく、伴って相談なし。					
<input type="checkbox"/> 2021 年不登校児童家族の相談あり。					
②保健室 (健康相談) 件数：延 75 件					
<input type="checkbox"/> コロナ禍での実施の工夫として健康管理シートを作成・使用。					
<input type="checkbox"/> 「車いすの学校」に集う人全員の体温測定と症状確認、交通手段を確認。					
<input type="checkbox"/> 学校の環境の整備として換気や消毒に加えて大型加湿器をレンタル					
③キャリア支援室相談実数：28 件					
<input type="checkbox"/> 事業年を通じて就業について相談利用あり					
<input type="checkbox"/> 2020 年：精神障がいにより休職中の方、ベトナム人技能実習生					
<input type="checkbox"/> 2021 年：就労支援 B 型通所者、知的障がい者、身体障がい者					
<input type="checkbox"/> 2022 年：内部障がい者、知的障がい者、精神障がい者、ベトナム人技能実習生					
(3) 「車いすの学校」参加による変化：Project Manager の観察					
①自己開示：B 型作業所に通所している知的障がい者について					
<input type="checkbox"/> 「『車いすの学校』での活動の面白さや、車いすのしくみへの興味は尽きることはなく、『車いすの学校』には来たいと思っている。」という言葉が聞か					

れるが、体調不良などの理由で休むことが多い。しかし、このことは「つながっていたい」という思いの表出と考えられ、かつ参加申込および休みの電話連絡は必ず為されることから、本人にとっての「居場所」や「役割」を得つつあることを認識していることの表れと考える。

- マッチングされた指導者（匠）に対して、参加当初にはなかった「自分は拘りが強い。」という自身の特性を表現する言葉が出るようになった。

■ 現存データ④

- 成功事例：「車いすの学校」後に就業した1事例について

- ・精神障がいにより休職中
- ・「車いすの学校」に定期的に参加
- ・第1号の対象修了者となった
- ・自身のキャリアに対する問いに対する反応

「修了後、年末までは生活リズムを維持するため「車いすの学校」に通うが、新年からはボランティア活動ではなく、求職活動によって得た職に就く。」

②就労・就学意欲、生活態度、対人コミュニケーションの改善：本人の言動

- 「車いす整備への興味関心は尽きない。家に帰ってもずっと教えられたことがどうやったらできるのか考えたりしている。」  
→ 就労・就学意欲（ボランティア内容に関する理解、役割獲得への一歩）
- 「教わっている途中で1度パニックになったが、廊下で1人にしてもらい冷静になる時間を持ったら収まってきた。家や職場（B型作業所）以外でもパニックへの対処ができた。」  
→ 生活態度、コミュニケーションの改善
- 「2人だと、もう1人の受講生のことが気になる。先生（指導者）と私だけであれば大丈夫。」  
→ 指導者とのマッチングによるコミュニケーションの改善
- 参加予約、および休む場合の電話連絡は、確実に実施前までに行った。  
→ 生活態度、対人コミュニケーションの改善

調査Ⅱ	<p>【関連する短期アウトカム】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「車いすの学校」の運営プロセスの記述により、社会的弱者への継続的支援を実現する実施モデルの周知・活用がなされる。</li> </ul>
1) 調査及び分析方法 「アウトカムの分析 ⑨波及効果」 「車いすの学校」ケーススタディ：実施内容のケースとしての記述：定性データ	
2) 実施時期 2023年3月～4月以降	
3) 対象者 自組織（匠・専門職）・専門家（大学研究者）	
4) 結果（明らかになったこと）	
<p>■ 現存データ①：車いす整備指導者（匠）の意見 障がい者通所施設（札幌市北区）での「車いすの学校」実施所感 直接観察</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 「精神障がい者」と聞いて医療専門職ならばすぐにイメージできることも、自分たち素人（指導者）にはわからず不安であった。通所施設などの事前見</li> </ul>	

学や障がい特性に合わせた丁寧な準備、時間の余裕をもった実施の必要性を感じた。

- 対象者の障がい特性に合わせた指導者（匠）のマッチング（合理的配慮）をすると指導がうまくいくことがわかった。
- 精神障がい者通所施設の方々は、興味を持ち楽しそうに一生懸命に整備をしていた。指導者（匠）も楽しんででき、教えれば響く感じもありポジティブな印象を受けた。
- 通所施設での実施：施設に来るや否や踵を返して帰っていく通所者もあり、「車いすの学校」が万人に受けるとは限らないことがわかった。
- 本会事務所以外の場所で「車いすの学校」を行うには、物品の準備・搬送などに多くの労力がかかる。継続的实施の場合、必要物品を貸出のもよい。

■ 現存データ②：障がい者通所施設の管理者の意見

自通所施設での「車いすの学校」実施所感  
直接観察

- 男性だけでなく女性も積極的に参加している。これほど自施設利用者が「車いすの学校」に興味を示すと思わなかった。
- 継続的に提供でき、車いす整備の基本講習修了者が輩出されることも好ましい。
- 自施設で行う「車いすの学校」のようなアクティビティへの参加を経て、自施設利用者が、飛んでけ車いすの会事務所で行っている「車いすの学校」に参加するようになったり、地域住民が実施している活動などに参加したりするようになることも好ましい。
- 「車いすの学校」のような、家でもない、職場（就労支援事業所を含む）でもない、第3の居場所となる可能性は高いがすべての自施設利用者がそうできるわけでもない。ひとつの選択肢ではある。そして、選択肢は広いほうがよい。
- 11～3月まで「車いすの学校」をアクティビティとして提供したが、実施に係る経費は休眠預金事業によるものである。今後の連携においては、経費等を含めどのような仕組みにすべきか話し合いながら進めていく。

調査Ⅲ	<b>【関連する短期アウトカム】</b>
	・応用編である既存の地域資源を活用した実施モデルが作成・周知され、各自治体が自立して社会的弱者支援を始めるための提案がなされる。
	1) 調査及び分析方法 「アウトカムの分析 ⑩事業の効率性」 (1) 「車いすの学校」に用いたヒト・カネ・モノ・情報（定量・定性データ） (2) 既存の地域資源に用いたヒト・カネ・モノ・情報（定量・定性データ） (3) (1)(2)両者の比較
	2) 実施時期 2023年3月～4月
	3) 対象者 自組織の財務状況など （「車いすの学校」および既存事業各々のヒト・カネ・モノ・情報など）
4) 結果（明らかになったこと） 千歳市・余市町のカウンターパートの可能性のある団体とつながりできたが、現地で	

の「車いすの学校」の実施や、各自治体が自立して行うための応用編（既存の地域資源）モデル作成に至らず、伴なって成果（定量・定性データ）の比較は未達である。

「車いすの学校」に用いたヒト・カネ・モノ・情報（定量・定性データ）  
 実践例) 精神障がい者通所施設（本会事務所以外の場合）のアクティビティ※として「車いすの学校」を実施した場合

- 登用した人財（ヒト）：
  - ・対象（社会的弱者）への合理的配慮ができるアクティビティ実施者：
    - 車いす整備指導者（匠）6名
  - ・対象（社会的弱者）への身体的・精神的・社会的健康を応援する専門職（健康相談、家族支援、キャリア支援の実施）
    - 養護教諭・看護職・社会福祉士・キャリアコンサルタント有資格者1名  
 本事業の起案者である本会会員がボランティアに実施。
- 使用したモノ
  - ・教材としてのリサイクル車いす
    - 主に札幌市在住者から本会に寄付された車いすで、主に本会ボランティアが回収したもの
  - ・整備道具 → 整備活動に使用
  - ・「車いすの学校」フライヤー、会報 → 周知活動への活用
- 用いた情報：
  - ・「車いすの学校」フライヤー、会報
- 必要経費（カネ）
  - ・アクティビティ費用（カネ）の試算（月1回の実施）  
 人件費・交通費・固定費（家賃など）

※アクティビティとは：活動。作業するプロセスを経て得られる対象者の生活行為における満足感や心地よさと言った感覚的变化が得られるもの。通所施設においては、作業療法士や看護師などの専門職の元で実施する活動とする。

### ③調査結果の考察（調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたか）

テーマにある“三方よし”の哲学は貫かれている。  
 定性データである各人の聞き取り、直接観察において今後の社会的弱者支援に非常に示唆的な内容は、社会的紐帯が「ゆるやかなつながり」である方がよいということである。雁字搦めの強すぎる紐帯は返って生きづらさを生むかもしれない。  
 「車いすの学校」はもとより既存の小規模でも多機能な事業を活用した社会的弱者支援において「ゆるやかなつながり」は、今後もキーコンセプトになり得る。  
 応用編のモデル構築には至らなかったが、引き続き「車いすの学校」の活動を続ける中で、社会的弱者支援としての小規模多機能事業の応用可能性を探り、記述し、評価していく。このことに対する社会的要請は必ずやあると考えている。

### (2) 実施体制

内部/ 外部	評価担当分野	氏名	団体・役職

内部	アウトカムの達成度 ・波及効果・事業の効率性	照井 レナ	飛んでけ車いすの会・理事
内部	事業の効率性	小林 志津子	飛んでけ車いすの会・会計
内部	アウトカムの達成度	吉田 三千代	飛んでけ車いすの会・代表理事
内部	アウトカムの達成度	佐藤 則夫 他 5 名	飛んでけ車いすの会・車いす整備ボランティア
内部	アウトカムの達成度・波及効果	長谷川 聡	飛んでけ車いすの会・監事
内部	アウトカムの達成度・波及効果	金子 正美	飛んでけ車いすの会・会員



#### 4. 事業の実績

##### (1) インプット (主要なものを記載)

①人材 *主に活動した メンバーの数 ( 11 ) 人	氏名	主な役割		
	照井 レナ	「車いすの学校」実施・校長・Project Manager		
	小林 志津子	「車いすの学校」実施・会計		
	吉田 三千代	「車いすの学校」実施		
	佐藤 則夫 他5人	「車いすの学校」・整備講師 (ボランティア)		
	広田 まゆみ 中村 慎一	白石区ネットワーク、ラジオによる広報 障がい者通所施設での「車いすの学校」実施		
②主な資機材	資機材名	用途		
	スチームクリーナー	車いすの清掃、汚れ落とし		
③経費実績 (概算)	契約当初	実績	差額	
	事業費の総額	3,923 千円	3,096 千円	▲827 千円
	休眠預金からの助成額	2,998 千円	2,580 千円	▲418 千円
	自己資金	925 千円	516 千円	▲409 千円
④本事業に投入した自己資金の種類と金額	名称	金額		
	会費	324 千円		
	イオン幸せの黄色レシートキャンペーン寄付金	192 千円		
		千円		
		千円		
	合計	495 千円		
	*金額が③経費実績の自己資金と一致			
⑤自己資金の資金調達で工夫した点	他の助成金からの自己資金調達は、同じテーマでは利益相反的な懸念もあって難しいと考え、抵触しない会費や寄付金をその調達源とした。			

(2) アウトプットの実績

アウトプット	社会的弱者への「車いすの学校」の実施 (札幌市、千歳市、余市町)
1) 指標 (1) 延参加者数 (2) 本事業がいう社会的弱者の参加者数 (3) 継続的参加者(2回以上参加者)数 (4) 参加者自己評価	
2) 初期値/初期状態 指標(1)～(4)の参加者なし	
3) 目標値/目標状態 (1) 延 120 人 (2) 社会的弱者の参加者：延 40 人/年 (3) 社会的弱者のリピーターの割合が参加者数の 5 割に達する (4) 参加者自己評価が毎回実施される	
4) 目標達成時期*事業計画書に記載した時期 札幌市：2022 年 3 月 千歳市・余市町：2023 年 2 月	
5) 実績値 全参加者中 25%弱、全修了生中 15%強が対象者であった。 2020 年：17 回実施、対象延参加者数：23 人/91 人中、対象修了生：1 人/5 人中 匠延指導回数：60 回 2021 年：12 回実施、対象延参加者数：8 人/38 人中、修了生：0 人/2 人中 匠延指導回数：28 回 2022 年：21 回実施、延参加者数：21 人/86 人中、修了生：1 人/8 人中 匠延指導回数：29 回 (2022 年 12 月 8 日現在) 札幌市：北区(出前教室)での実施。3 月まで毎月 1 回実施。延 32 人を推計。 千歳市・余市町：障がい者支援団体とのネットワークの第一歩を踏み出している。	

アウトプット	「車いすの学校」の機能である専門職による家族相談・健康相談・ キャリア相談の実施
1) 指標 (1) 家族相談 (PTA) 数 (2) 健康相談 (保健室) 数 (3) キャリア支援室 利用数	
2) 初期値/初期状態 指標(1)～(3)の参加者なし	
3) 目標値/目標状態 (1) 年間相談数 40 件程度 (2) 年間相談数 40 件程度 (3) 毎年利用がある	
4) 目標達成時期*事業計画書に記載した時期 札幌市：2022 年 3 月 千歳市・余市町：2023 年 2 月	
5) 実績値	

<p>(1) 家族相談 (PTA) : 対象者家族からの相談 2021 年不登校児童家族の相談あり。得意分野を發揮してもらうことになり会報の挿絵を担当してもらう。</p> <p>(2) 健康相談 (保健室) : 延 73 人実施。 (コロナ禍での実施の工夫として健康管理シートを作成・使用。「車いすの学校」に集う人全員の体温測定と症状確認、交通手段を確認。学校の環境の整備として換気や消毒に加えて大型加湿器をレンタル)</p> <p>(3) キャリア支援室 : 2020 年は、精神障がいにより休職中の方やベトナム人技能実習生、2021 年は、就労支援 B 型通所者、2022 年知的障がい者やベトナム人議の実習生の方など、事業年を通じて就業について相談利用あり。</p>
--

アウトプット	札幌市白石区・千歳市・余市町において、「車いすの学校」を活用した社会的弱者 (障がい児・者、引きこもり、不登校、生活困窮、外国人労働者) 支援を可能にする実施モデルを作成する。
1) 指標	
(1) 実施モデル作成	
2) 初期値/初期状態	(1) 助成以前から実施している「車いすの学校」運営内容
3) 目標値/目標状態	(1) 2023 年 2 月、3 地区について、年間収支計画・年間活動計画を含む実施モデルの作成
4) 目標達成時期	札幌市 : 2022 年 3 月 千歳市・余市町 : 2023 年 2 月
5) 実績値	札幌市 : 精神障がい者を主なメンバーとする地域活動支援センター (障害者総合支援法) において、創作活動や社会との交流促進を図るアクティビティの一環として実施。①実施打合せ→②実施→③メンバーの地域活動センター外での「車いすの学校」への参加→④修了生輩出までの一連のプロセスに約 6 か月間を要し、「車いすの学校」のセンターでの実施は行事月を除く月 1 回程度を 4 回実施。概ね 5 回の参加で車いす整備の初期課程の修了が可能となるが、1 名の対象者が本会事務所で「車いすの学校」を受け修了生される。 千歳市・余市町 : 障がい者を支援する団体へのプロジェクト説明 その他 : 京極町 : 社会福祉協議会やボランティア団体との協働

アウトプット	北海道内のどの地域でも、「車いすの学校」または小規模多機能である既存の地域資源を活用して、社会的弱者 (障がい児・者、引きこもり、不登校、生活困窮、外国人労働者) 支援を可能にする実施モデルを作成する。
1) 指標	
(1) 実施モデル作成	
(2) 報告書の配布数	
2) 初期値/初期状態	(1) 札幌市白石区・千歳市・余市町における「車いすの学校」運営内容
3) 目標値/目標状態	

(1) 2023年2月応用編作成済： 「車いすの学校」以外の小規模多機能な地域資源を活用した北海道内市町村に適用できる実施モデルの作成(大都市/大都市近郊市/中核都市/小規模自治体編など最低一件具体案を作成する)
4) 目標達成時期 2023年2月
5) 実績値 モデル構築には至らなかったが、京極町、白老町などのネットワークを活用する、千歳市において、障がい者支援団体協議会への渡りがついているので、引き続きモデル事例の記述に取り組みたい

(3) 外部との連携の実績

<p>□ 精神科に特化した訪問看護を主軸とし地域活動センター(Base24)を運営する事業所であるNorth Actとの連携により、車いす整備講師(ボランティア)にとって、整備技術の伝承する上で必要な障がい特性を勉強させてもらいながら実践することができた。また、82か国のうち最も車いすが届けられた国がベトナムであり、600台を超える。札幌ベトナム交流グループのベトナム人メンバーを通じて車いす整備技術の指導を受けたいと申出があり、介護職に就いている技能実習生(社会福祉法人えぼっく勤務)、もしくは特定技能を有する対象者を含め、「車いすの学校」の参加者を募集し実施した。以上の実践より、生活状況、就労・就学・社会参加意欲、コミュニケーションレベル、参加者の振り返りやその日の感想などの自己評価が得られたことは、社会的弱者を対象とする「車いすの学校」の今後の運営に活かすことができるという点で有意義であった。</p> <p>□ 自組織既存のネットワークを洗い出し、最初にそれらにあたってみるのがひとつ工夫点になるのではないかと考える。</p>
--

5. アウトカムの分析

(1) アウトカムの達成度

①短期アウトカムの計画と実績

短期アウトカム	<p>1. 社会的弱者(障がい児・者、引きこもり、不登校、生活困窮、ベトナム人労働者)が「車いすの学校」に参加し、居場所を持ち、ひいては就労・就学・社会参加意欲、およびコミュニケーションが向上する。</p>
	<p>1) 指標</p> <p>(1) 「車いすの学校」が居場所だと言葉が聞かれる</p> <p>(2) 参加者同士のコミュニケーションの度合い</p> <p>(3) 生活リズムの変化</p> <p>(4) 車いすの修理から社会の仕組みや社会的意義を理解し、自らが取り組む意味を見出す</p> <p>(5) 「車いすの学校」以外の地域の場にも参加する</p> <p>(6) 就労を目標とする参加者に就労意欲の変化</p> <p>(7) 就学を目標とする参加者に就学意欲の変化</p>
	<p>2) 初期値/初期状態</p> <p>対象者ごとにベースラインを定める。</p>

3) 目標値/目標状態 指標(1)～(7)について、参加以前よりも積極性がある。
4) 目標達成時期 札幌市：2022年3月 千歳市・余市町：2023年2月
5) アウトカム発現状況(実績) (1)「車いすの学校」が居場所だと言う言葉が聞かれる ・昼食持参で訪れ食べて「車いすの学校」に参加するという行動が見られた。 ・「(「車いすの学校」に) 途中から行けてはいないがつながっていたい。」 (2)参加者同士のコミュニケーションの度合い ・コロナ禍、講師1人に対して参加者2人以下を徹底しつつも、講師、参加者間のコミュニケーションは促進。 ・障がい特性により、マンツーマンの指導にした場合でも講師とのコミュニケーションは促進。 (3)生活リズムの変化 ・参加の申し込みができる(障がい)。 ・「複数回分の参加予約を入れ、学校当日断りの電話をするということを繰り返している。」が、実施日の認識はあり、断りの電話は必ず入れられる(障がい)。 ・本州の実家への引越しに伴って辞めることを電話連絡することができる(障がい)。 (4)車いすの整備活動から社会の仕組みや社会的意義を理解し自らが取り組む意味を見出す ・整備点検された車いすが海外に届けられることを理解して整備に取り組む(障がい) (5)「車いすの学校」以外の地域の場合にも参加する ・「車いすの学校」の参加を機に仲間になった日本人とともにプロジェクトに参加する(ベトナム人技能実習生) (6)就労を目標とする参加者に就労意欲の変化 ・「車いすの学校」修了者に引き続き整備ボランティアについて打診すると、「この後、仕事を探す」と回答する。 (7)就学を目標とする参加者に就学意欲の変化 ・不登校・保健室登校児童に「車いすの学校」を紹介する会報の表紙イラストを描いてもらうことはできたが、「車いすの学校」に参加するまでに至らなかったため未達。
6) 事前評価時の短期アウトカム

短期アウトカム	2. 「車いすの学校」の機能である専門職による家族相談・健康相談・キャリア相談の実施
1) 指標 下記、「車いすの学校」の機能各々の相談件数および相談内容・対応内容・結果 (1) 家族相談数(PTA) (2) 健康相談数(保健室) (3) キャリア支援室相談数	
2) 初期値/初期状態 (1)～(3)ゼロ	
3) 目標値/目標状態 (1)40件(年間)/自己開示と見なしうる相談があり、8割以上の解決がなされている	

(2) 40 件(年間)/自己開示と見なしうる相談があり、8 割以上の解決がなされている
(3) 20 件(年間)/自己開示と見なしうる相談があり、8 割以上の解決がなされている
4) 目標達成時期*事業計画書に記載した時期 札幌市：2022 年 3 月 千歳市・余市町：2023 年 2 月
5) アウトカム発現状況（実績） 以下、札幌市での実施 (1) 家族相談数（PTA）：成人については家族同伴の参加なく伴って相談なし。2021 年不登校児童家族の相談あり。要望については解決。 (2) 健康相談数（保健室）：延 73 人実施。バイタルサインおよび握力測定、アンガーマネジメントチェック表、うつ度チェック実施。看護師によるフィードバック。 (3) キャリア支援室相談数：2020 年：延 23 人（障がい・外国人） 2021 年：延 8 人（障がい）、2022 年：延 28 人（障がい・外国人）事業年を通じて就業について相談利用あり。
6) 事前評価時の短期アウトカム

短期アウトカム	3. 「車いすの学校」の運営プロセスの記述により、社会的弱者への継続的支援を実現する実施モデルの周知・活用がなされる。
1) 指標 (1) 各自治体の認知件数 (2) 各自治体からの依頼件数	
2) 初期値/初期状態 (1)・(2)ゼロ	
3) 目標値/目標状態 (1) 周知目標：北海道内 179 市町村、3 年間で連携した社会的弱者支援団体およびその他 10 か所以上の社会的弱者支援団体 (2) 検討数目標：3 自治体・団体	
4) 目標達成時期 (1) 2023 年 3 月 (2) 2023 年 4 月以降	
5) アウトカム発現状況（実績） (1) 周知目標 <input type="checkbox"/> 道内市町村：6 市町 札幌市、京極町（社会福祉協議会、きょうここ）、蘭越町（社会福祉協議会、学校）、白老町（地域食堂）、千歳市（奉仕活動を行う組織）、余市町（介護関連事業所） <input type="checkbox"/> 社会的弱者支援団体：6 団体 札幌市（フリースクール、生活困窮者支援団体）、札幌市白石区（就労支援系サービス事業所、コミュニティラジオ）、札幌市北区（地域で暮らす障がい者の日常・社会生活サポート機関）、ベトナム人技能実習生支援団体 (2) 検討数目標 札幌市北区（地域で暮らす障がい者の日常・社会生活サポート機関）の通所施設では、アクティビティとしての定期実施について検討に入っている。	
6) 事前評価時の短期アウトカム	

短期アウトカム	4. 応用編である既存の地域資源を活用した実施モデルが作成・周知され、各自治体が自立して社会的弱者支援を始めるための提案がなされる。
1) 指標 (1) 各自治体の認知件数 (2) 各自治体からの依頼件数	
2) 初期値/初期状態 (1)・(2)ゼロ	
3) 目標値/目標状態 (1) 各自治体の認知件数 (2) 各自治体で提案モデルの検討にいたった件数	
4) 目標達成時期 (1) 2023年3月 (2) 2023年4月以降	
5) アウトカム発現状況（実績） (1)・(2)とも未達である。 <p>本会事務所での「車いすの学校」以外の活動として、白石区でのコミュニティラジオ出演、京極町の社会福祉協議会の支援団体、蘭越町・白老町コミュニティワーカーとのアイデアピッチ、千歳市では奉仕活動を行う組織とのディスカッション、そして訪問市町村でのウィンドシールドサーベィなどを実施してきた。</p> <p>以上より小規模でも多機能な居場所となりうる既存の事業があることがわかったが、具体的にモデルを構築するには至らず、伴なって提案モデルの検討に入った自治体もなかった。</p>	
6) 事前評価時の短期アウトカム	

## ②アウトカム達成度についての評価

「車いすの学校」と同様、小規模で多機能な居場所となりうる既存の事業は少なからずあることはわかった。しかし、コロナ禍の中、時間切れのためにモデル構築には至らず、今後もネットワーク構築を含め、既にある事業を活用した社会的弱者支援に引き続き取り組んでいく。

## (2) 波及効果（想定外、波及的・副次的効果）

平均年齢73歳の車いす整備の匠の若返りは目的のひとつであった。若返りはもちろん好ましいことであるが、高齢者でも活動への意欲や体力、知力を備えていれば、人財（材）として、むしろ若者や本会を助けてくれる存在になる（想定外）。  
 一方、車いす整備の匠（高齢者）にとっても居場所となり、活躍し、やりがいを持つ場となる事を改めて認識するに至った（波及的・副次的効果）。

## (3) 事業の効率性

居心地の良い第三の居場所づくりにおける人財活用（ヒト）

**【特定した事実】**

- ①社会的弱者への合理的配慮ができるアクティビティ実施者：  
整備技術を伝承する匠 6 名
- ②社会的弱者への身体的・精神的・社会的健康を応援する専門職：  
(健康相談、家族支援、キャリア支援)  
看護職・社会福祉士・キャリアコンサルタント各 1 名

**【価値判断】**

本会は基本的には収益事業を持たないボランティア活動をメインとした NPO 法人である。よって、本事業においても人件費はかからないともいえるが、もし本事業を一から立ち上げるとすれば、どれだけの費用(カネ)を投じなければならないであろうか。前述のアクティビティ実施者や健康づくりを担う人財の人件費・交通費だけでも、60 万円(年 24 回の実施として)以上が必要でプラス固定費となると年間 100 万円ほどの費用(カネ)が必要となる。

□ 成功事例

**【特定した事実】**

精神障がいにより休職中の参加者が「車いすの学校」定期的に参加し、第 1 号の修了者となった。キャリア支援記録によると、「修了後、年末までは生活リズムを維持するため「車いすの学校」に通うが、新年からはボランティア活動ではなく、求職活動によって得た職に就く。」と報告があった。

**【価値判断】**

2020 年の日本人の平均賃金は 3 万 8515 ドル(OECD「Average wage」より)であり、日本円にして約 4,143,000 円(1 ドル 107.57 円換算(2020 年 4 月 1 日付け))である。若者 1 人が再就職をすれば年間のこれだけの効果があること、この当事者が次のステップに進めたことなど、本事業だけではないにしても、その一翼を担ったことは事実であろう。

□ “三方よし”の「車いすの学校」

**【特定した事実】**

- ①「車いすの学校」全参加者 215 人中、社会的弱者 52 人  
「車いすの学校」社会的弱者参加実数 29 人 複数回参加実数 8 人
- ②「車いすの学校」全修了者 15 人中、社会的弱者 2 人
- ③「車いすの学校」全匠指導回数：117 回(いずれも 2022 年 12 月 8 日現在)
- ④3 年間で海外に贈られた車いす：236 台(2023 年 1 月 28 日)

**【価値判断】**

本事業は、世界規模の車いすのリユースの仕組みが“くるくる”継続的に回っていくことによって、日本における社会的弱者支援が成り立つというモデルである。その第一段階は、使われなくなった車いす(モノになる前の状態)を手に入れることであり、国内外のユーザーへと贈るに足るモノするための整備が必要である。本会では、車いすを安全・安楽に使えるようにする整備者の高齢年齢化と数の不足を課題として抱えていた。そこで、本会の社会的弱者支援の経験を踏まえ、前述の事例のように、社会的弱者が「車いすの学校」を第 3 の居場所とし、この活動を通じて次のステップへの足掛かりにしてもらえたらという思い、また、属人的要素もしくは障がい特性によっては、丁寧に磨くことができたり、細かい作業が得意だったりする人もいるだろうとの期待により本事業の対象を設定した。



本事業の哲学である「本会よし、参加者よし、地域よしの“三方よし”」は選考時「単に整備担当者の量産にならないように」と指導された。

□ 車いすのリサイクル活動

【特定した事実】

寄付を受け整備した車いすの処分には見えない費用（カネ）がかかっている。使われなくなった車いすは、札幌市では500円で粗大ごみとして引き取っており、年間500台を処分している。使われなくなった車いすの実に80%は捨てられており、その処分費用は500円では収まらず、かつアルミニウムなどのリサイクル資源にすらなっていない（札幌市環境局）。粗大ごみになる前に本会に寄付をしてもらい有効活用していることで、費用（カネ）が抑えられていると言える。世界には7,000万人（WHO調べ）もの車いすを必要とする人々がいるにもかかわらず、経費（カネ）をかけて捨てている現状をどう見るか。これがサステナブルな世界であろうか。

## 6. 成功要因・課題

成功要因として、本会や「車いすの学校」について、活動拠点星園はオープンで皆が訪れやすい環境、個人の社会における地位に重きをおかない、常連がいて空間やトーンを形成する、そして新たな来訪者を引きつけて新参者にも優しい、健全で、その中には無駄遣いや派手さはなく家庭的な感じなど、第3の居場所のあるべき特徴を兼ね備えていたことと考える。伴って、「車いすの学校」が、社会的弱者を含む地域住民、つまり“ごちゃまぜ”の対象で実施されたこと、「車いす整備」を通じたコミュニケーションが促進されたこと、「車いすの学校」に付帯する機能である健康相談、家族支援、キャリア支援などが専門職との対話によってなされたことである。

一方、本事業が社会的弱者として定義した対象の中で、三障がいの方々、外国人技能実習生にたどり着くことは比較的容易であったが、一方、貧困、不登校、8050といった課題を有する人々は、昨今のニュース等から支援ニーズはあると推察されるものの、会うことには困難があった。また、コロナ禍にあり、医療・福祉サービス事業所、市町村事業であっても実施のタイミングを伺うような状況もあり、そこに対面でしか伝承の難しい「車いすの学校」が入る余地は少なかった。

## 7. その他深掘り検証項目（任意）

--

## 8. 結論

### (1) 事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
①事業実施プロセス			○		
②事業成果の達成度			○		

### (2) 事業実施の妥当性

三障がいを持つ方々、引きこも、8050 問題、外国人実習生等々、特に引きこもりは全国に 100 万人はいると言われており、多くの社会的弱者が生きづらさを抱えている。このように多くの困難を抱える人々が集える家でも職場でもない第 3 の居場所づくりは、課題・ニーズとして適切であったと考える。

一方、「車いすの学校」の講師を務める匠たちは平均年齢 73 歳の高齢者であるが、彼らにとって活躍の場であり、また居場所となる可能性があり、持ちつ持たれつの地域包括的なしくみづくりとして、その必要性は高かったと考える。

課題・ニーズに対して小規模でも多機能な「車いすの学校」を活用したところに事業設計の整合性はある。しかし、対面で行うことが好ましい事業であるにもかかわらず、開始から Covid-19 感染症の影響を受け、人数制限が必要であったり、事業自体が実施できなかったりと、計画通りには進まず、実施状況については課題が残る。

「車いすの学校」のような地域に既に存在する小規模多機能事業を社会的弱者支援に活用するというモデル構築は未達であるが、助成期間が終了したのちも引き続き取り組んでいく所存である。

## 9. 提言

本会は「国内外の障がい者・児の生活の質向上」「国内外のボランティア活動の発展」を理念に活動を継続してきており、来年には 25 周年を迎える NPO 法人である。本会が本事業を継続していく上で重要なことは、とりもなおさず飛んでけ車いすの会が存続し、「車いすの学校」が継続して実施され、世界に 7,000 万人いる (WHO 調べ) とされる車いすを必要とする人々のもとに届ける活動が、“くるくる”と円環的に継続されていくことにあるのではないかと考える。

本事業は、世界規模の車いすのリユースの仕組みを使い、世界とつながりながら日本の社会の課題である社会的弱者支援を図るという特徴・優位性を有する。最近では、ALL JAPAN ウクライナ支援の参加団体として車いす 50 台を本会から提供しているが、「車いすの学校」の講師や修了生が整備を担当している。

本事業において「車いすの学校」というコミュニティは、支援する側される側の垣根をつくらず、対象は“ごちゃませ”で運営してきた活動でもある。今後も、本会の活動に賛同し、ボランティアとして参加してくれる方々をさらに増やし本会の活動を継続していくこと、すなわち、地域住民“ごちゃませ”で、車いすを手から手に届ける活動を“くるくる”と続けていくことをミッションとしていく。

## 10. 知見・教訓

雁字搦めの強すぎる紐帯は返って生きづらさを生むかもしれない。社会的紐帯が、「ゆるやかなつながり」である方がよいということである。そのうえで、「車いすの学校」や本会が居場所になる、安心して時々来てみるができる、そのような場になることを求める。

「車いすの学校」はもとより既存の小規模でも多機能な事業を活用した社会的弱者支援において「ゆるやかなつながり」は、今後もキーコンセプトになり得る。

## 11. 資料（別添）

\*添付したものにチェックを付けてください。

<input checked="" type="checkbox"/>	事前評価報告後に見直した事業計画やロジックモデル
<input type="checkbox"/>	事後評価報告時の事業計画やロジックモデル
<input checked="" type="checkbox"/>	事業の様子がわかる写真資料
<input type="checkbox"/>	広報活動の成果品、報道された記事
<input type="checkbox"/>	アンケート調査結果や実際に使用した調査票
<input type="checkbox"/>	とりまとめられた白書
<input type="checkbox"/>	論文、学会発表資料
<input type="checkbox"/>	その他（2023年3月末までに成果報告書を作成予定）
<input type="checkbox"/>	その他（ <input type="text"/> ）